

明治時代から大正時代中期のわが国の住宅における「ガラス建具」の普及について

—「ガラス建具」が与えた日本住宅の変化を中心に—

内田・須崎研究室 長谷川 政平

研究概要: 文明開化による西欧文明の導入は、日本の建築に板ガラスという近代的な材料を導入するきっかけになると同時に、改良を模索した明治期の住宅にも取り入れられる。本研究では、明治時代から関東大震災が起こる大正 12 年までの間に、わが国の住宅にどの程度、また、どのような場所からガラスが用いられたのかを研究した。

研究目的: 本研究では、板ガラスの国産化が始まる以前から国産板ガラスが普及していくまでの段階を追い、輸入品の高価なガラスは住宅のどの箇所に積極的に用いられたのか、またガラスという新しい素材がわが国の住宅にどのような変化を与えたのかを明らかにする。

研究成果: 言説による分析と、図面による分析から、以下のようなことを確認できた。

言説による分析

表 1：住宅におけるガラスの言説の主な傾向

発行年	防寒性「ガラス建具」推奨	日本家屋の寒さ批判	換気減少「ガラス建具」批判	換気改善の提案	緑側外回ガラス建具提案
M21					
M22					
M23					
M24					
M25					
M26					
M27					
M28					
M29					
M30					
M31					
M32					
M33					
M34					
M35					
M36					
M37					
M38					
M39					
M40					
M41					
M42					
M43					
M44					
M45					
T1					
T2					
T3					
T4					
T5					
T6					
T7					
T8					
T9					
T10					
T11					
T12					

大正 6 年から、防寒性による「ガラス建具」の推奨、日本家屋の寒さの批判が盛んになる。

図面による分析

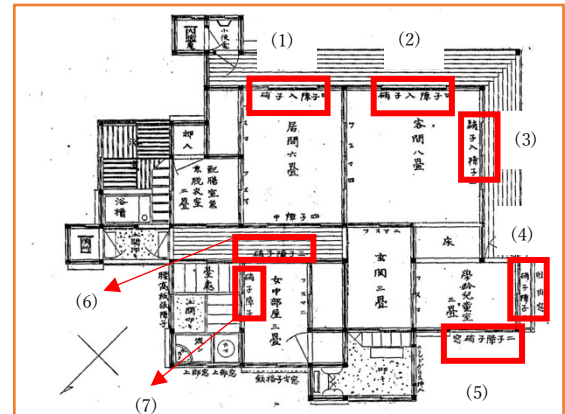


図1 「ガラス建具」使用例

上図のように、平面図の記載より、「ガラス建具」をカウントした結果、集まった 491 例の図面の内「ガラス建具」を使用したものは、317 例あった。また、「ガラス建具」の使用箇所の合計は 1021 箇所となった。

表 1 内障子としての「ガラス建具」の使用率推移



内障子¹⁾としての「ガラス建具」の使用率推移を見ると、大正 5 年以降、減少していることがわかる。ここから、防寒性に有効なガラスを外側へ用いる傾向が高まったことがうかがえる。

1) ここで言う内障子とは、外気に触れない建具のことであり、図 1 の (6) や (7) のようなものを示す。

明治 21 年～大正 12 年までの「婦人衛生雑誌」を中心に言説を分析すると、防寒性対策としての「ガラス建具」の推奨とそれに伴う日本家屋の寒さの批判、換気量減少による「ガラス建具」の批判とそれに伴う換気の改善策の提案、また、防寒性・換気量に配慮した緑側外回りの「ガラス建具」の提案が確認できた。表 1)

防寒性改善のために「ガラス建具」を導入した結果、建具の密閉性が向上し、換気量が減少してしまった。しかしこれは、日本住宅に換気孔設備や緑側の外回りガラス障子など、新たな提案をもたらした。

苦労した点や感想など: 昔の資料を探る必要があったため、探しにくい資料や、読みづらい資料もあり、大変でした。